

# 美術館の公共性の保障と美術館建築の機能

## —開放性を基軸とした相互作用に着目して—

藤 澤 まどか

### 1. はじめに

本研究では、美術館の公共性の保障と美術館建築の機能について、開放性<sup>(1)</sup>を基軸とした相互作用に着目しながら考察することを目的とする。現在、美術館を取り巻く状況としては、指定管理者制度の導入や財政的な問題等があり<sup>(2)</sup>、制度や活動内容の面での見直しに迫られている。そのため、美術館活動を行う基盤もそれに伴って揺らいでいると言え、公共機関として美術館が活動を行っていくうえでも、公共性の保障は重要な課題となる。

美術館の公共性の保障に関しては、作品や資料に関すること等、様々な要因が絡み合っているが、本研究では美術館建築の機能に着目する。その理由として、美術館建築は展示空間に代表される美術館内部を形成するため、美術館の基礎的活動に大きな影響を及ぼすだけでなく、美術館外部である周辺環境・周辺地域と密接に関わることから、美術館と美術館以外の要素との関係性を問うさいに重要な位置付けにあると考えられるからである。換言すれば、美術館建築は、“美術館”と美術館以外の要素を区分する側面もあるため、美術館建築の在り方によって、人々が入りやすいと感じられるか否か、社会に開かれた雰囲気を持っているか否かといった物理的条件を形成することになる。そのため、美術館建築は、様々な人々が利用しやすいと感じられるような雰囲気の形成に寄与することから、公共性の保障を行うさいに看過できない要素であると言える。

また、開放性を基軸にする理由としては、美術館が人々や社会に開かれた活動を行うさいに中心的な概念になるとともに、前述のように、様々な人々が利用しやすいと感じるような雰囲気を形成するさいの一つの指標になると考えられるからである。特に、美術館建築による開放性の創出は、来館者の美術館での体験と直接関わるため、来館者との関係性を考慮した美術館活動につながる可能性を秘めている。さらに、美術館建築による開放性の創出は、美術館の周辺環境・周辺地域との関係から成立する側面があるため、社会に開かれた機関としての美術館活動を支えるだけでなく、美術館がまちづくりや地域再生・都市再生と関わる契機となる。

このようなことから、美術館や美術館建築の公共性に関わる側面を整理するとともに、美術館と美術館建築が開放性を基軸として公共性の保障に結び付く側面を明らかにしたい。

## 2. 美術館の公共性の保障

まず、美術館の公共性の保障を考える前提として、博物館法に規定されている収集、保管、調査研究、展示・教育といった基礎的活動に注目する。別稿でも述べたように、美術館の基礎的活動と公共性とのつながりが密接であることから<sup>(3)</sup>、美術館自体が公共性を保持する機関として活動することを視野に入れなければならない。この場合、美術館の基礎的活動に深く関わる作品や資料への近づきやすさが公共性を保障するさいに不可欠になる。そのため、作品解釈に関する工夫や配慮が欠かせず、美術館活動に実際に携わる学芸員や職員等の美術館スタッフの取り組みが問われることになる。

また、美術館が公共機関として活動するさいには、ハンナ・アーレント（Hannah Arendt）が述べるような「公的（public）」<sup>(4)</sup>であること、つまり、第1に、「万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示されるということ」と、第2に、「世界そのもの」を意味し、その世界とは、「私たちすべての者に共通するもの」であり、「私的に所有している場所とは異なる」ため<sup>(5)</sup>、このような条件を満たす<sup>(6)</sup>として美術館が捉えられる必要がある。そのため、上記の美術館スタッフだけでなく、来館者や美術館周辺の地域住民や他の人々が、それぞれの方法で美術館活動に関われることが必須となる。

そもそも、美術館活動については、必ずしも来館することがなくても、美術館の展示作品や資料からインスピレーションがわいて作られた製品を手にとったり、美術館がまちづくりや地域再生・都市再生の一端を担ったりすることを通して、様々な人々の生活に深く関与していると言える。そのため、様々な人々がそれぞれの方法で美術館活動に関われるだけでなく、その関わりを意識できるような説明責任（アカウンタビリティ）も同時に果たさなければ、美術館と様々な人々との関係性も不明瞭なままとなる。そのため、美術館と様々な人々との関わりを実感できるような仕組みの構築や教育活動を進めて、美術館活動の理解を促進することが肝要となろう。

したがって、美術館の基礎的活動に関しても、美術館スタッフだけでなく、来館者や美術館周辺の地域住民や他の人々との関係性の中に存在していることを相互に理解することが課題になる。このような活動が蓄積していくことで、作品や資料への近づきやすさが生まれていく。つまり、美術館活動は、作品や資料を介して人と人とがつながり、作品や資料への近づきやすさを土台として、過去と現在と未来とが結び付く側面があると言える。このようなことを踏まえると、美術館の公共性の保障が重要な位置にあることが再確認できる。

さらに、美術館の公共性を来館者の立場から考えるさいに、作品鑑賞を中心にすると作品解釈の多様性を認めることも重要な事柄になる<sup>(7)</sup>。それは、来館者一人ひとりの感じ方は異なるため、そのような多様性を認識し、様々な人々を認め合う姿勢の形成を支援する活動も美術館の公共性の保障に寄与すると考えられる。そのため、美術館でも多様性を認め合えるようなバの創出が必要条件となり、人と人とのつながりを生み出せる契機を含むことに加えて、作品や資料を保護する観点からも美術館建築を伴う空間を活用することが有効であると考えられる。

### 3. 美術館建築の機能と公共性の保障

#### (1) 美術館への入りやすさ

上記のことから、美術館の基礎的活動を進めていくさいにも、作品や資料、美術館スタッフ、来館者や美術館周辺の地域住民や他の人々といった様々な人々が交流できるようなバを具現化することが公共性の保障に寄与すると理解できる。そのさい、美術館建築によって形成される空間的要素の影響も看過できない。それは、美術館の基礎的活動と照らし合わせてみても、作品や資料の保管や保護の面、作品や資料の鑑賞空間の形成と美術館建築は切り離せないからである。もちろん、美術館活動の中には、美術館建築という施設面の要素にとどまらない活動もあるが、作品や資料の収集、保管、調査研究、教育・展示といった活動を円滑に支える一つの手立てとして、美術館建築の重要性は指摘できよう。そのため、“美術館”という空間を形成する美術館建築の面から、美術館の公共性について分析することが必要になる。

そのため、美術館の公共性の保障について、美術館建築の作用に注目して分析するさいには、美術館建築が美術館への入りやすさを形成する要因として捉えることが重要になると言える。それは、前述のように、公共性の保障には全ての人が美術館に関われる状態を生み出すことが必要であるため、その前提として美術館が入りやすく、利用しやすい機関であるか否かが中心となるからである。

このようなことから、何度も美術館に来館している人々だけでなく、今まで来館したことのない人々に対しても、美術館に入りやすいと感じられるような美術館建築の構成であることが求められる。もちろん、美術館スタッフの対応の仕方や美術館の立地や交通手段といった条件も美術館への入りやすさに影響するとは言え、人々を迎え入れる具体的な空間を形成する美術館建築の在り方が問題となる。そのため、美術館が人々に入りやすい機関として認識されるには、作品や資料への近づきやすさと、美術館建築によって生み出される美術館への入りやすさの問題をどのように解決するかという点に集約されると思われる。

したがって、美術館に対するイメージや印象は、作品や資料や美術館建築によっても形成される側面があることが理解できるが、『「建築＝ハコ」と『展示される美術品＝モノ』とに齟齬があってはいけないし、ましてやハコが優先されるということも、健全な状況ではない』<sup>(8)</sup>ように、美術館活動と美術館建築とがコンセプトを共有することで相乗効果をもたらし、美術館に対するイメージや印象の改善に寄与する側面があると考えられる<sup>(9)</sup>。

また、美術館建築は、美術館とそれ以外の空間を区別する作用があるため、美術館建築の構成によっては、開放的な印象になったり、閉鎖的な印象になったりする。つまり、美術館に対するイメージの形成は、美術館活動の内容だけでなく、美術館建築による印象によっても左右されると言えるため、美術館建築のコンセプトに加えて、建築物の素材<sup>(10)</sup>や構成の仕方が問題になる。それは、美術館建築が生み出す空間の印象によって、人々が自分たちに身近な美術館として感じるか、自分たちに疎遠な美術館として感じるかといった違いをもたらし、人々と美術館の距離を感覚的に伝えることに

なるからである。つまり、美術館建築が人々に開放的な印象をもたらす場合、利用しやすく親しみのある機関として認識される契機となり、美術館建築が人々に閉鎖的な印象をもたらす場合、人を寄せ付けず、美術館活動を開かれたものにすることはできない。このようなことから、美術館建築は美術館への入りやすさに直接影響する事柄であることが確認できる。

## （2）美術館建築による開放性と境界線

次に、美術館建築は美術館内部を形成することから、来館者に当該美術館の性質や理念やコンセプトを空間的に示唆する側面があると言える。それと同時に、美術館建築は美術館外部との境界線としての機能も持つため、美術館と美術館外部との関係性を暗示する側面もある。このような美術館建築の作用については、別稿でも述べたが、美術館建築がランドマークとして機能したり、地域の中の風景の一部としての役割を担ったり、記憶や継承といった事柄に関与したりすることから<sup>(11)</sup>、美術館活動は決して内部で完結するものではなく、必ず他の要素との関係性の中に存在している。そのため、美術館建築は、作品や資料を保管・保護する側面を持つとともに、美術館の周辺地域と密接に関わっていると見え、まちの歴史や記憶と結び付くだけでなく、美術館を中心に新しい価値を付与する可能性も秘めていると言える。このようなことから、美術館が美術館建築を介して、まちづくりや地域再生・都市再生にも関与することになる。

これに関連して、美術館建築に対するイメージや印象の基礎となる「建築体験のしかた」は、「建物を固定した物体と見るもの」ではないため、「静的なイメージのもの」でもなく、「われわれは建物に上り、その中を歩むのであり、くるくる動くわれわれの目は無数の印象を記憶にとどめる」といった動的な側面がある<sup>(12)</sup>。つまり、「建築体験のしかた」を基礎にすると、「過去の建物は中立性を保った遺物へと退行してゆくのではなく、それらの生成と以後の用途とを何かしら伝えつづけるものとして扱われる」のである<sup>(13)</sup>。そのため、美術館建築の社会的意義や役割や機能とともに、美術館建築を取り囲む人々のイメージや印象や解釈も相俟って、様々な人々に受け継がれていくことになる。このような意味でも、美術館建築と公共性の保障が切り離せない事柄であることが読み取れる。

したがって、前述の美術館建築の境界線としての機能は、固定されたものではないと言える。それは、ゲオルク・ジンメル（Georg Simmel）が、「社会的な意義をもつのは空間ではなく、空間の部分にかんして心から生じる編成と総括である」<sup>(14)</sup>と指摘するように、空間に対する人々の心理的な影響力が見出せるからである。つまり、人々の「心から生じる編成と総括」によって、空間の意味や役割も変容すると言えるため、人々が美術館という空間をどのように読み解くかによって美術館建築の境界線としての機能の程度も変化すると言える。

このように、空間を捉えるさいに問題になるのが、「境界」<sup>(15)</sup>の概念であるが、「こうして社会も、その存在空間が鋭く意識された境界によってとり囲まれていることによって、内的にもまた共属するものとして特徴づけられる」<sup>(16)</sup>ように、境界の存在によって、人々が属する対象が明確になる一方で、それ以外の対象を排除する可能性も浮上する。つまり、「相互の境界づけのこの一般概念が空間的な

境界から得られるにしても、ともかくより深く考えれば、この相互の境界づけも、たんなる現実的な心的な境界づけ過程の結晶化もしくは空間化にすぎない」<sup>(17)</sup>ため、「結晶化もしくは空間化」が、排他的に固定化し、強固になると、様々な人々が交流できる余地が減少すると見受けられる。

上記のジンメル指摘を踏まえると、「境界」とするか否かは、「心的な出来事」である一人ひとりの感覚やイメージに起因しているだけでなく、空間自体の性質によっても異なる問題と考えられる。つまり、「美術館」という「境界」の程度は、人々の感覚やイメージによって定められる側面があるため、上記のように、自己と身近な機関とするか、それとも自己と疎遠な機関とするかという違いを生み出すことになる。その一方で、物理的な「境界」を形成する美術館建築に関しても、美術館と他の要素との境を緩やかに捉えるような形式で建造された場合、「境界」は解かれ、逆に、その境を明確にし、排他的な形式で建造された場合、「境界」は歴然として存在することになる。つまり、「境界」の表れ方によって、美術館が人々や社会とつながるのか、それとも隔離されていくのかが決定付けられると言える。

このような現象を美術館活動に当てはめた場合、美術館活動の側面から考えると、「境界」を強固にしていくと、美術館が他の要素とやりとりすることやコラボレーションを行う可能性が失われてしまったり、交流の機会を逃したりすることになる。そして、人々の立場から考えると、美術館に親近感を覚える人とそうでない人に分かれ、美術館活動に参加するか否かの立場に二分されてしまう危険性が生じてしまう。

そのため、「境界」の取り扱いには細心の注意が必要であり、美術館としての独自性や専門性を確保しつつも、美術館建築によって生じる境界線が閉鎖的であると公共性を保障することはできない。したがって、美術館活動の独自性や専門性といった事柄を確保しながらも、美術館活動に様々な人々が参加できるような交流の機会や開放性の創出に配慮することが不可欠である。つまり、美術館の基礎的活動や美術館の社会的使命や理念やコンセプトといった根幹となる事柄は遵守しながらも、それらを土台として様々な人々を受け入れられるような開放性が必要になる。

#### 4. 美術館と美術館建築をつなぐ開放性

##### (1) 信頼関係の構築と開放性

これまでの考察を踏まえると、美術館の開放性については、“様々な人々が訪れやすく、人々や社会に開かれた活動や状態”の実現にあることから、様々な人々が美術館に入りやすく感じられるような手立てが欠かせない。具体的には、美術館が目前にある場合、人々が美術館に入りやすいと感じるとともに、美術館が様々な人々を迎え入れられるような構成であることが求められる。

特に、美術館建築の開放性を具体的に捉えながら分析するさいには、第1に“美術館内部”，第2に“美術館内部と外部”，第3に“美術館外部（美術館の周辺地域への影響）”の三つの視点が重要になる。

第1の“美術館内部”に関しては、美術館の内部構成によって、空間と空間の連関を生み出したり、



美術館外部とのつながりを感じられたり、美術館のコンセプトと関わったりすることで、開放的な空間を創造して公共性の保障に結び付く側面がある<sup>(18)</sup>。

第2の“美術館内部と外部”に関しては、美術館内部と外部が交差したり、相互浸透したりすることで、内部と外部の境界線を解いていく作用がある<sup>(19)</sup>。そのため、美術館と美術館を取り巻く周辺環境・周辺地域との関係性を意識する契機となり、美術館が美術館だけで成立するのではないことを明確にする側面がある。

第3の“美術館外部（美術館の周辺地域への影響）”に関しては、リノベーションされた美術館<sup>(20)</sup>や新しく建造された美術館が周辺環境・周辺地域の関係性を取り入れることで、まちづくりや地域再生・都市再生と関わる側面があり、周辺地域の人々が利用しやすい契機となったり、周辺地域以外の人々にとっても当該地域の魅力を創出したりすることがある。そのため、美術館建築を建造するさいに、周辺環境・周辺地域への視野を取り入れることによって、様々な人々が美術館に対するイメージを更新し、閉鎖的ではない機関として認識するきっかけを含むと言える。

上記の三つの点から美術館建築の開放性が生じることが理解できるが、これらの開放性を支える一つの観点として、美術館建築が“透明性”を保有することがある<sup>(21)</sup>。例えば、美術館建築が透明性を保有することによって、美術館内部からは外部を、外部からは内部を認識することができるようになり、美術館活動に対する興味・関心を引き出したり、その活動を提示したりすることに寄与する可能性がある。

しかしながら、ここでいう“透明性”とは美術館建築の物理的な側面だけに該当するものではなく、美術館の活動内容についての透明性も含まれている。そのため、美術館活動や美術館建築の透明性によって、開放性を物理的に表現するだけでなく、人々の心理的側面にも影響を及ぼし、様々な人々に開かれた機関として活動を行っていることを具体的に提示することになる。つまり、透明性は公開性と結び付く側面があると言え、美術館での展示・教育活動のように公開性を保持する活動とともに、美術館の社会的意義や役割や機能を公開することになり、そのような活動が積み重なることで透明性を保有することにもなる。

したがって、美術館活動や美術館建築の透明性は、人々に美術館活動の内容を明らかにしたり、美術館が見られる対象や討議の対象となることを指し示したりする側面があるため、様々な人々が関わられるような機会を生み出し、美術館と人々や社会とのコミュニケーションを支え、美術館に対する信頼関係の構築に寄与すると言える<sup>(22)</sup>。このようなことから、美術館建築の透明性と美術館活動の透明性が密接に関わっていることが理解でき、美術館の公共性の保障に関しても、開放性を支える一要素である透明性を保持することが重要であると読み取れる。

## （2）美術館を取り巻く相互作用による開放性

上記の事柄を踏まえると、美術館の建築物が開放的であっても、美術館の活動内容が閉鎖的であれば、開かれた機関として活動していくことは難しいと言える。これに関しては、「通常は公共的とみ

なされる建築物である広場や街路が、それ自体で公共空間であると言うことはできない」<sup>(23)</sup>とされるように、単に物理的な空間を生み出すだけでは、公共機関として存在することはできない。そのため、ジンメルが述べるように、「人間のあいだの相互作用も—それがそうでないばあいのすべてを除いて—また空間を充足することとして感じられる」<sup>(24)</sup>ことを踏まえると、美術館や美術館建築に関しても、来館者と作家、来館者と美術館スタッフといった人々の関係性が含まれることで相互作用が生じ、“美術館”という空間を満たすことになる。

さらに、美術館と美術館の周辺環境・周辺地域に置き換えた場合にも同様に考えられる部分があり、双方が相互作用することで、当該地域の雰囲気も変化すると言える。このように、相互作用が生まれることで、「両者のあいだの空間は充たされ、活気づけられる」<sup>(25)</sup>だけでなく、「相互作用が、以前は空虚であり無であった空間をわれわれにとつての何ものかとし、空間が相互作用を可能とすることによって、相互作用が空間を充たす」<sup>(26)</sup>ため、相互作用を基礎にして、人々が美術館を“自分たちに身近な機関”として捉える契機となっていく。その結果、人々の美術館の利用のしやすさにも影響を与えろと言え、美術館活動や美術館建築に関しても、人々や周辺環境・周辺地域との相互作用を行えるような取り組みや工夫や配慮が不可欠になる。

そのため、美術館と人々や周辺環境・周辺地域に関する相互作用に加えて、様々な要素とコミュニケーションや連携をとることも美術館の公共性を保障するうえでは看過できない条件になる。それは、「公共性は、共通の世界に対して相異なった立場を占める人びとの間に交渉が生じる関係のあり方を指している」<sup>(27)</sup>ことから、人々の間や機関や組織の間で交流を行えるような機会がなければならないからである。

つまり、美術館建築に関する取り組みや工夫や配慮だけでなく、例えば、ポンピドゥー・センター・メス（Centre Pompidou-Metz）のように「大屋根の下に入場無料の大空間フォーラム」があったり<sup>(28)</sup>、金沢 21 世紀美術館の無料で利用できる交流ゾーンのようなスペースがあったり<sup>(29)</sup>、ナッシャー彫刻センター（Nasher Sculpture Center）での「Target First Saturdays」のような無料で参加できるイベントを開催したりすることで<sup>(30)</sup>、美術館建築による体感的な開放性を実現するとともに、交流できる空間の確保やイベントの開催を通して、美術館が全ての人々に開かれた機関であることを示す契機になると言える。

したがって、“美術館”という空間を公共機関として成立させる仕組みや空間の利用方法が確立されなければならない。しかも、その利用方法は、美術館に携わるスタッフや来館者のみに共有されるものだけではなく、美術館スタッフや来館者以外の人々にも共通の事柄として受け入れられるような状態にななければならない。そのためには、美術館での教育活動に加えて、家庭教育や学校教育との連携が欠かせず、社会全体で美術館の役割について学びつつ、検討し続ける必要がある。また、美術館活動が他の分野や要素と連携できるようなネットワークの構築も相互作用を行うさいには看過できないと言えよう。

このようなことを踏まえると、美術館建築といった物理的側面のみの透明性や公共性だけでなく、

美術館の基礎的活動と相俟って、美術館の公共性の保障は実現される。つまり、美術館の基礎的活動を担う美術館スタッフや来館者やその他の人々との協力が欠かせないと言える。

## 5. おわりに

以上のことから、美術館と公共性の保障と美術館建築の機能について、開放性を基軸とした相互作用に注目すると、以下の3点が重要な事柄になる。

第1に、美術館の公共性の保障にむけて、美術館の基礎的活動と照らし合わせながら、作品や資料、美術館スタッフと来館者や美術館周辺の地域住民や他の人々との関係性、美術館建築といった様々な要素を総合的に把握することが挙げられる。また、美術館と人々との関係性を明確にすることで、作品や資料への近づきやすさが生まれ、美術館に対するイメージや印象も変容するため、美術館を利用しやすい機関として認識する可能性がある。

第2に、美術館建築の機能と公共性の保障については、美術館の基礎的活動と照らし合わせながら認識するとともに、美術館建築を美術館の周辺環境・周辺地域を成り立たせる一つの要因として捉えることが挙げられる。

特に、美術館建築は、美術館への入りやすさを形成する重要な要因となるだけでなく、美術館活動と調和することで作品や資料への近づきやすさを生み出し、作品や資料への近づきやすさも美術館への近づきやすさに結び付いていくことになる。そのため、人々の美術館に対する心理的なイメージの形成に影響すると言え、美術館建築は人々が美術館を利用しやすいと思うか否かに直接関わることになる。したがって、美術館建築の在り方についても、開放性を感じられるような構成であることが、公共性の保障の実現に貢献すると考えられる。

また、美術館建築による開放性と境界線の作用に留意しつつ、周辺環境・周辺地域との関わりを意識し、まちの風景をかたちづくる要素として認識することで、美術館以外の要素との関わりを視野に入れた活動を行う端緒になると言える。したがって、美術館としての独自性や専門性は保ちつつも、相互作用や交流の機会を保持することで、美術館建築によって生み出される境界線も解かれていくと考えられる。

第3に、美術館の公共性の保障と美術館建築の機能が、開放性を基軸に結び付くということである。それは、上記のように、美術館の公共性の保障の面からは、作品や資料への近づきやすさを形成する美術館活動の開放性が重要であり、その開放性を生じさせる一つの手立てとして美術館建築の機能は看過できない。つまり、美術館建築によって生じる空間が、様々な人々が訪れやすく、人々や社会に開かれた活動や状態を体现している場合、美術館に開放性が創出され、美術館の公共性の保障に寄与すると言える。そのため、美術館の公共性の保障は、美術館建築による開放性の創出と密接に関わり、美術館建築によって生み出された開放性が美術館全体の開放性にもつながっていく。したがって、美術館活動と美術館建築の双方が開放性を保持することで、美術館の公共性の保障を支える基礎になると言える。そのさい、美術館活動と美術館建築の透明性を確保することも重要であり、様々な人々が



美術館に関われるようなバを創出することが必要である。

上記のような観点から、美術館の公共性の保障と美術館建築の機能が開放性を基軸に相互作用することで、美術館が様々な人々にとって訪れやすく、人々や社会に開かれた活動や状態を維持することに寄与し、美術館の在り方を改善することに貢献すると考える。

注(1) 本研究では、開放性を“様々な人々が訪れやすく、人々や社会に開かれた活動や状態”として定義する。

(2) 『新しい時代の博物館制度の在り方について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」報告書』これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議，2007年，pp. 3-4。

(3) 拙稿「美術館活動と公共性に関する一考察—開放性に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 16-2，早稲田大学大学院教育学研究科，2009年，pp. 81-91。

(4) Hannah Arendt, *The Human Condition*, Chicago: The University of Chicago Press, 1958, p. 50. 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫，筑摩書房，1994年，p. 75 参照。

(5) Ibid., p. 50, 52. 同前，p. 75, 78。

(6) 本研究では、倉田公裕・矢島國雄が、博物館を構成する要素として「モノ（物）、ヒト（人）、バ（場）」が不可欠であるが、「単なるモノ、ヒト、バ」ではなく、特に、「バ」については「単なる場所ではない、すなわち単なる施設でなく、その施設（博物館という建物・空間）を活用し、活動する機関を構成する要素の一つとしてのバ」であると指摘していることを参照しつつ、単に場所として存在するだけでなく機会や契機等の意味合いを含む場合、「バ」と表記する。（倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』（6版），東京堂出版，2004年，pp. 34-35。）

(7) これに関して、アーレントは、「人間の多数性」は「公的領域である出現の空間にとっては必要不可欠な条件」とするだけでなく、「この多数性を取り除こうとする企ては、必ず、公的領域そのものを廃止しようとする企てに等しい」と述べていることから、多様性と公共性の保障とは密接に関わっていると言える。（Hannah Arendt, op. cit., p. 220. 前掲『人間の条件』p. 349.）

(8) 並木誠士『「モノ」をめぐる場のあやうさ』並木誠士・中川理『美術館の可能性』学芸出版社，2006年，p. 130。

(9) 例えば、金沢21世紀美術館のように、美術館コンセプト（「1 世界の『現在（いま）』とともに生きる美術館」「2 まちに活き、市民とつくる、参画交流型の美術館」「3 地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館」「4 子どもたちとともに、成長する美術館」と、建築コンセプト（「まちに開かれた公園のような美術館」として「多方向性＝開かれた円形デザイン」「水平性＝街のような広がりを生み出す、各施設の並置」「透明性＝出会いと開放感の演出」がある）とが有効につながる場合、美術館活動の内容が美術館建築を通して、来館者や美術館周辺の地域住民にも伝わることになる。（金沢21世紀美術館「館内のご案内」リーフレット，[2011.7]，及び、金沢21世紀美術館ホームページ，[http://www.kanazawa21.jp/data\\_list.php?g=11&d=1](http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=11&d=1)，[http://www.kanazawa21.jp/data\\_list.php?g=35&d=1](http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=35&d=1)，2011.9.25 閲覧参照。）

(10) 例えば、間宮は、「建物の外壁」を境界の例として挙げ、外壁の素材がコンクリートの場合「内外両空間を分離する」のに対し、ガラス壁である場合「分離するとともに両空間を結びつける働きをする」ことを指摘している。（間宮陽介「交わりとしての都市—境界の視点から」植田和弘他編集委員『都市の個性と市民生活』岩波講座 都市の再生を考える，第3巻，岩波書店，2005年，p. 208.）

(11) 拙稿「美術館建築の社会的影響—記憶と継承の観点から—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 17-2，早稲田大学大学院教育学研究科，2010年，pp. 59-68。

(12) Spiro Kostof, *Original Drawings by Richard Tobias, A History of Architecture: Settings and Rituals*, New York & Oxford: Oxford University Press, 1985, p. 10. 鈴木博之監訳『建築全史—背景と意味』住まいの図書館出版局，1990年，pp. 29-30。

- (13) Ibid., pp. 10-11. 同前, p. 30。
- (14) Georg Simmel, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Dritte Auflage, München und Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1923, S.461. 居安正訳『社会学』下巻, 白水社, 1994年, p. 217。
- (15) Ebd., S.465. 同前, p. 222。
- (16) Ebd. 同前, p. 223。
- (17) Ebd., S.467. 同前, p. 225。
- (18) 拙稿「美術館内部の開放性に関する一考察—空間の知覚に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 17-1, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2009年, pp. 85-96。
- (19) 拙稿「美術館内部と外部の交差—美術館建築の作用に着目して—」『学術研究—教育学・生涯教育学・初等教育学編—』No.57, 早稲田大学教育学部・早稲田大学教育会, 2009年, pp. 7-19, 及び, 拙稿「美術館内部と外部の相互浸透—周辺環境との連関から—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 18-1, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2010年, pp. 225-236。
- (20) 詳しい内容に関しては, 拙稿「美術館とリノベーション—周辺地域への影響を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 19-1, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2011年, pp. 13-22を参照されたい。
- (21) 以下の“透明性”の詳しい内容に関しては, 拙稿「美術館建築と透明性—開放性の創出との関わりから—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 No. 18-2, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2011年, pp. 33-42を参照されたい。
- (22) 同前, pp. 38-40。
- (23) 篠原雅武『公共空間の政治理論』人文書院, 2007年, p. 17。
- (24) Georg Simmel, a. a. O., S.461. 前掲『社会学』下巻, p. 218。
- (25) Ebd., S.461-462. 同前。
- (26) Ebd., S.462. 同前。
- (27) 齋藤純一「都市空間の再編と公共性—分断／隔離に抗して」植田和弘他編集委員『都市とは何か』岩波講座 都市の再生を考える, 第1巻, 岩波書店, 2005年, p. 150。
- (28) 坂茂「ポンビドー・センターとの7年間」『新建築』Vol.85 No.9, 新建築社, 2010年, p. 53。
- (29) 金沢 21 世紀美術館ホームページ, [http://www.kanazawa21.jp/data\\_list.php?g=9&d=2](http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=9&d=2), 2011.9.25 閲覧。
- (30) “Nasher Calender Fall 2009”, Nasher Sculpture Center, リーフレット。Nasher Sculpture Center ホームページ, <http://www.nashersculpturecenter.org/Events-Calendar/Target-First-Saturdays>, 2011.9.26 閲覧参照。

#### 〈付記〉

本研究は, 科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号：20730514）「美術館と公共性に関する研究—美術館建築による開放性の創出に着目して—」の研究成果の一部である。